

## 養蠶農家は語る

誌名	農業総合研究
ISSN	03873242
著者	穴戸, 壽雄,
巻/号	3巻2号
掲載ページ	p. 281-295
発行年月	1949年4月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



# 養蠶農家は語る

長野、山梨兩縣下における座談會記錄

〔御断り〕 當研究所ではかねて研究中の問題と関連して、二月から三月にかけて農業關係主要輸出品の質態調査を實施した。その中で計畫部の愛甲、馬場、齋藤、穴戸、恒松の調査班は、製絲業及び養蠶農家の調査を目的として、長野、山梨兩縣下の一部製絲工場と農村を廻つた。關係者の御好意で、各所で適切有效な座談會をもち、農家や關係者の卒直な意見を豊富に聞くことが出来た。所定の計畫に従つて實施した各般の調査の結果は、かくの如き意見をも參照して出来る丈早い機會に纏まつた報告書として公にし度いが、かにかくに、今聞いて歸つた現地生産者の切實な聲の一部を、その餘韻の残つた儘に記録して大方の參考に表したい。

## 一、鼎村にて

日時 昭和二十四年二月十九日

場所 長野縣下伊那郡鼎村農業協同組合

出席者

養蠶農家は語る

研究所側 愛甲(A)、馬場(B)、齋藤、中山、穴戸(S)、

恒松

村側(敬稱略) 鷲見 鼎村日農組合長、縣農地委員

水野 元農業會理事

木下 農民組合委員、養蠶組合副組合長、農協

理事

矢澤 縣農地委員、農協理事、農民組合常任委

員

小川 養蠶技術員

竹村 農事研究會會長、養蠶生産費調査農家

新井 養蠶農家

櫻井 耕地整理事務所事務擔當者

鷲見(球) 果樹技術者

a 今回の調査の目的についてお話願いたい。

A 調査の目的は、今回の單一爲替レートの設定に関連して日本の將來を考え、政治的面を全く離れて純經濟的立場より差し迫

つた問題を究明するための實地調査である。そのために、研究所としては、輸出面に重要な地位を占める生絲を中心として、養蠶製絲兩面の生産費を調査するために、長野・山梨・群馬三縣を對象として選んだわけである。その方法として實際に養蠶家・製絲家の實情を視、廣く意見を聞くと共に、輿論調査と戸別調査を併せて參考資料とした。そこで戰前と現在と比較して收繭量ほどの程度低下しているか。

a 最盛期の三分の一程度には少くとも落ちていっていると思うが、研究所のあなた方は實際に觀察されてこの地帯を養蠶地帯と思いませんか。

A 他の土地とは一見して異うと思う。

b 最盛期では畑地は殆んど桑園であつたが、戰時中より戰後にかけて主食の増産のために止むなく桑を抜いた。それが現在では爲替レートの問題がある爲に、貿易としての生絲の重要性を認めながらも新植補植を躊躇している状態である。

c 吾々の村では食糧の生産は自給のため、皆が努力していることは勿論のこととして、現金収入をふやす方法として養蠶以外に目ぼしい手はなく、やりたいと思つていても將來性が不安で行き悩んでいる。

d 然し吾々養蠶家はもつと目覚めなくてはならない。というのは、従来は唯蠶を飼うことにのみ専念していた。然もその不眠不休の努力の結晶である繭は製絲業者に安く買い上げられ、最も大きい利潤を搾取されていたのだ。此の點を考えなくてはなら

ぬ。

e 蠶種の問題にしても、製絲業者は自らの利益のために養蠶家の經營を無視して、一代交雜蠶種の奨励をし、無理に押し付けて来たような面が極めて大きかつた。

S その點、ここには組合製絲があるのだから、恵まれているのではないか。

d いや、どうして！ 恵まれるどころか、組合製絲は全く民主的でなく、一部ボスの専断に委ねられている状態だ。

S 然し民主化しようと思えば、出来るのではないか。

e いや、それが出来ないのだ。形としては組合製絲であるが實質は企業製絲と全く變りはない。例えば、繭の買付けに際しても、その價格の決定について、農家に繭檢定の技術的知識がないために、一方的のものになつてしまつてゐる。上伊那の組合製絲と比較しても、水引きを大きく見積つてゐるために、價格が安くなつてゐる。とにかく、吾々が搾取されていることは事實であつてそのため天龍社を分割して吾々の手に取り返そうという話も出てゐる位だ。

d 組合製絲があまり大きくなり過ぎたことが民主化を阻んでいるのだ。

S 事業規模が大きいから民主化出来ない、小さければ民主化出来ること云うことは言えない。又組合製絲を分割して小規模のものを多く造ることは、生産過程の凡ゆる面から見て不利ではないか。

e そう言われればそうだが。然し現實に吾々は搾取されている。吾々はその搾取されている利潤部分を取り返したいと思つてゐる。

f それよりも吾々は今後どういう行き方をしたら良いのか、それが一番の問題であると思う。

A 戦前盛んであつた時代の養蠶と現在の養蠶とでは國際市場の状況から見ても、その他色々の條件について見ても、大きな相違がある。國內的に見ても戦時戦後を通じて經濟外事情によつて多くの改變があつたが、今後はむしろ經濟的理出からもつと深刻に色々變化して、世界經濟の大勢に照應してゆくであらう。例えば、主食との關係がそうだろう。吾國の現状から見ても、今より四年後に於てもなお四百萬トンの食糧の輸入は不可避であらう。この他、國の經濟復興に必要な多額の生産財も亦輸入に俟たねばならない。それらの大きな輸入代金を賄うために、生絲を出来るだけ高く輸出することは、吾國の立場からは當然の要諦なのであるが、それにも拘らず、之が日本だけで解決出来ないところに、皆の悩みがある。このような事情を皆さんも長く知つて置いて頂きたい。

e 生絲は米麥作と異つて、桑樹・蠶種・蠶・繭・製絲・織物と多くの段階を経過するものであり、此の時間的問題も考慮に入れて考えなくてはならぬと思う。

e 吾が國民は現在衣料には相當の不足を來している。生絲を先づ國內消費に充當し、その餘剩部分を品質を優良にして輸出す

るのが當然ではないか。それを安くしてでも輸出しなくてはならぬということは、之こそ飢餓輸出であつて、日本人の生活水準を引下げることに役立つのみではないか。

f 現在この邊の輸出關係は一體全體どうなつてゐるのか。

B 現在綿紡が純受取六千萬ドルで第一位、生絲は四千五百萬ドルで第二位である。勿論大部分は米國向けである。今飢餓輸出という言葉が出たが此の言葉はあまり感心しない。というのは、現在のところ貿易は管理貿易であり、昨年六月迄に生じた八億ドルの入超も占領地救済資金で支拂われている状態である。言わば吾々の飢餓を救済して貰つた輸入代金は、全くクレヂットに頼つてゐるのが實情なんだ。更に輸出能力の點から見ても、輸入物資は一ドル一三〇圓、輸出は三三一圓か一ドルという換算であるが、このことは取りも直さず吾國の生産力が低下していること、言いかえれば、それだけ輸出能力が低下していることとなる。然も、現在輸入している物資は、日本の産業復興上絕對必要なもののみである。だからどうしても輸出能力を上げることが感請される譯である。

e そうすると以前の如く低賃金に甘んずるといふことになる譯ですね。

B 低賃金と云うのは生産力が低下しているからである。現在は確かに賃金は安い、然し製品當りの原價から言へば、賃金が高くなつてゐる。勞働者も樂ではないが、企業家にとつても得な状態ではない。搾取されてるとすれば「低能率」そのものに搾取

されている形だ。

e 日本が米國から高い物資を輸入してそれに加工しているという事は、今後の問題として不安に思えるのだが。

B 日本の現在の工業生産の能率は昭和五乃至九年に比較して約一五パーセントに低下しているのであるが、此の能率低下が、どこから来ているものであるかを考えて貰いたい。

f 要するに、吾々養蠶家として、如何にして生産力を上げ生産費の低い經營をして行くか、又出来る見込があるかが問題である。

e それはそうだが、大切なことは、かかる經營を行ひ得たとしても、その輸出までの行程に於て、従来の如く、資本家の神取が行われてはならないことだ。それは兎も角、一三〇圓と三三三圓との開きある貿易は、日本の國力の消耗であり、之は貿易を行えば行くだけ甚だしくなると思う。

B そうではない。現在のレートだけから言えば、一ドル一三〇圓で入れて之が加工過程を經ているうちに、能率が低いために三三三圓で一ドルという勘定になつて行くのである。こういう状態では一人前の貿易はできない筈だ。それでも貿易がとにかく行われているのは、クレヂットのお蔭だ、まだ一人前の顔をして損得を言える状態ではない。一人前になるためには、生産力を上げることだ。そして現在の輸入も生産力を上げるための輸入なのである。

f 何故生産力が落ちてきているのか。

B 基礎資材・原料・副資材等生産材の不足が最も大きい原因である。昨年生産力が上つたのは、石炭・鐵礦石等の輸入が増したためだ。ここで必要な資材の輸入が増せば生産力は上る筈である。

e アメリカから輸入している小麦の価格は幾何になつていくか。

B 現在のところ救済資金によつて賄われているが、弗建價格を國內の公定に換算すれば、一ドル一八八圓位のレートになる。之を一ドル三三三圓で換算すれば割高となる。しかし之は高く輸入しているということではない。ところでこういう割高の計算になるのは、米國政府が援助物資として一括して買付けている爲に高値を示していることと、爲替レートが圓安になつているためである。將來援助をうける必要がなくなる頃には價格も下るであろうし、爲替レートも圓高になるであろうから、今よりは安く輸入することも可能となるであろう。

e いや、そうは思われない。日本はどうしても輸入しなくてはならぬのであるから、不利でも高い價格で買わざるを得ないであろう。その場合、日本政府は吾々國民からは安い價格で食糧を買い上げ、高い輸入食糧とつきまぜて、適當な價格で國民に配給するのでないかと思う。現在の日本の政府ならば、國民を苦難の道に追い込む如き政策をやり兼ねないだろうと思う。

B どうも一方的な考えだ。ただここで注意したいことは、外國で高い小麦であつてもそのまま日本へ入つて高くつくとも言

えないし、又安いものでも高くなることもある。それは爲替相場次第だ。假に將來、小麥が高くなつても日本の工業生産力があつていれば、爲替が高くなつて高い小麥が割安に入つて来ることになるではないか。然も戦後のことでもあるから食糧はだんだん安くなる傾向にあると思う。そして爲替もだんだん圓高になるだろうから、むしろ將來の問題としては、安い外國食糧との競争のことを考えるべきだ。そのためには、農業の生産力を上げることだ。日本の政府を攻撃するより生産力増強を考えて欲しい。

A 色々面白い問題もあると思うが、今後の桑園増植の問題に就てどう考えるか。

a 食糧との競合問題が大きい。政府は桑園の間作にも主食の供出を割當てるような施策を行つている。一體吾々は何を主體として、農業を續けて行くべきか判断に苦しむ。

b 之は食糧調整の面に於て技術的にも何とか出来る問題であると思う。

e いや、そうではない。強制的割當が現實に存在するのであつて、調整の面ではどうすることも出来ぬ。

f 之に關しては作付轉換の問題も起つて來ると思うが、それは後の問題として之位で本座談會を散會としたい。(恒松制治記)

## 二、飯田にて

日時 昭和二十四年二月二〇日

場所 長野縣蠶業試験場飯田支所

出席者

研究所側 愛甲(丁)、馬場(B)、宍戸(S)

試験場側 場長、試験職員C他五名

養蠶農家A他二名

場長紹介 挨拶の後

場長 皆さんお寒い所を御苦勞様でした。單一爲替レート設定に伴い養蠶農家の間で色々な迷いが出ているらしく、昨年以來繭の増産の意欲は非常に上つて來てはいるものの、仲々思うような増産になつていない。養蠶業の將來についてどのようにお考えですか。

1 私達がこの深い山にかこまれた伊那谷に入つて來てみて、深く感じたことは、このような村で農業が成立するためには何かが金に變る作物を作るといふ以外には多くの人々を養うことが出来ないという事であつた。換金作物という場合にそれが賣れてしかも所得が生産費を償ふかどうかということが問題になるのであつて、生絲のような場合は外國に賣れるかどうかという事が第一の問題となる。

場長 確に繭の場合は國內消費の米の場合と異なり生産コストをどの位引下げ得るかということが繭生産の切實な課題となる。私の考えでは反當りの繭増産による生産費の引下げ、即ち桑園能力の向上が第一の解決策であると思う。研究所側のお考えはどうですか。

1 一口に生産費の引下げといつても、反當生産力、労働生産

力の向上を始めとして、その他の費用の色々な条件を考え合せて始めて一つの結論が出るのであつて、これさえあればという萬能藥があるわけではなく、色々な条件の組合せをいかにするかというのが我々の問題となる。爲替一つで物事が決まるわけのものでもない。

**C** 単一爲替レートの決定はどういう風に農業に影響するでしょうか。

**B** 爲替というものは國と國との物價水準の高さ低さを調節する役目をはたすものですが、その水準の相違があんまりひどくなると爲替のたてようがなくなる。物價に應じて爲替がきまるのだといえらると同時に、爲替がきまるとある國の物價が他の國に波及していつて、その間にある高さの水準がきまつてくるともいえます。そこで一方の國がインフレにでもなると、他の國では爲替を通じてそのインフレが自分の方に波及してきては困るので、爲替を遮断しておいた方が都合がよいことになる。現在の日本は、そのインフレのために、他國、主として米國との間で、爲替なしの貿易をやつています。日本から輸出する場合は國內の價格で買取つて、これと關係なく國際價格でうつている。輸入の場合には國際價格で買入れて、これに關係なく、國內價格で拂下げています。政府は採算を考えないで貿易をやつています。しかも巨額の入超を行つています。採算を度外視して入超をやつていふという大した經濟力をもつていふように聞えますが、實はこれは自力でやつていふのではない。米國のクレジットに頼つてやつていふこ

とです。クレジットがなくなれば、とてもこんな變當はできません。ところが御存知のようにクレジットは早晩なくなるはずのものなので、その時の準備のためにも、その時までには爲替が手放しに行われるようにしておかなくてはならない。この頃、問題になつている一本レートも本當の意味の爲替ではなく、いわばそれへ移つてゆくための過渡的な措置である。

現在、輸入品の平均レートは一三〇圓、輸出品の平均レートは三三三圓であるといわれているが、新しい単一レートといつても單純に輸出入の平均をとるといふわけではなく、大體輸出の平均レートに近い處できまるのではないかと思ふ。そうなると輸入品は今迄一ドルのものが一三〇圓で拂下げられたのが急に三三三圓程度になるかというところではない。そうなつては國の經濟の安定なり發展なりに悪い影響がおこるからである。

輸入品の半分は食料であり、四分の一が鐵鋼、石灰という基礎資材であり、後の四分の一が棉花、羊毛などの加工原料である。そこで輸入レートを引上げる。つまり國內へ拂下げる價格を引上げるということは、食料の値段を引上げることによつて賃金を上昇させ、基礎資材が値上げされることによつて輸出産業の生産コストを高め、輸出を引合わなくさせる。食料が上るといふことは農家にとっては好都合と思われるかも知れないが、國民經濟全體の再生産條件はそういうことを許さないので。

一口に単一爲替レートの決定といつても、その影響は品目によつて一様ではない。輸出品の中には、例えば生絲のように三三三

圓という平均レートでは、引合わないということがおきる。そういうものには暫定的には補助金を出すということが一部でいわれている。生産能率の低下した我國の産業で輸出を振興するにはどうしても現在の低下した能率を引上げなくてはならないが、これは今すぐできることではない。援助すれば能率が上がる見込のある、重要な輸出産業には暫くは何等かの形で補助金を出して、その生産力を高めさせねばならないかと思う。しかし補助金といつても「價格差補給金」であるとはかぎらない。輸出商品に政府が補助金を出して價格を安くして輸出振興を行うということは貿易繁栄の精神にも反するし、又外國における競争相手であるナイロン等の會社にも反對されるおそれがある。しかし完成品に對して直接補助金を出すのではなく國民經濟の安定、農業經濟の復興という線でその生産過程においても生産條件を改善し、従つて能率が上つて、生産費の下がるような手段を政府の手で行なうということは、筋の通る考え方だろうと思う。外國の迷惑にならないにすむような經濟力を養うためにすることもあるから「生産補助金」ならば差支えないのではないかとも思われる。生産のどの段階に、どこにどんな施策が行われれば能率が上り、生産費が下がるかという點をお聞きすることが、我々の調査の目的である。

A それでは急激な經濟狀態の變化はないものと考えてよろしいか。

B それは「急激な」という程度の問題でもある。一本レート

の設定によつて生産能率を向上することがどうしても必要であるという意味で、大きな變化である。しかし何らの手もうたないで一本レート設定による影響を開放しにして、まだ弱い日本の經濟を國際的競争にさらすのではないと思う。たゞ、いまのまま日本の經濟を國際的競争にさらせば大變なことになる。競争に耐えるような力を養うための一方式が單一爲替レートの設定でもある點を考えると、何でもかでも一本レートを開放して行なおうというのではないと思う。

二四年度の計畫では輸出五億弗、輸入九・五億弗となり、その差額四・五億弗が米國からのクレジットで賄われる。これを全部一弗三三〇圓位のレートで換算すると一、五〇〇億圓の財政収入となり、それだけ通貨が收縮してインフレはとまるとも考へも出てくる。これが一本レートを野放しにした場合の結果でもあるが、生産が上らないで通貨收縮だけが行われれば所謂飢餓恐慌となる。そこでクレジットを活用して必要な輸入物資を餘り高い價格でなく國內に流して、基礎資材を經濟的に供給し、人件費を低下させて生産能率を上げ生産力を増し輸出を振興することの方が大切だといえる。通貨收縮だけを考へず、ある程度のインフレは忍んで生産の向上によつて「結局において」經濟の安定を齎らそうとする。つまり米國が金を貸して呉れている間に混亂を回避しながら生産力を上げてゆこうというのが現在の方向であると思う。

場長 兩生産費の引下げの方法として、第一に乘國能率の向上



を考えている。昔は川路村のように反當四〇貫の收蠶量だったものが、現在では一一貫という数字になつてゐる。之を昔にまで戻せば生産費はずつと下ることとなる。それには肥料をやることだが、現在のような高い金肥では駄目だから、専ら自給肥料に重給を置くように鑑試としては指導している。戦前桑葉八〇〇貫とれていたが、現在のままでも配給肥料を全部桑園に入れればまだまだ反當收蠶量は上ると思ふ。試験場の桑園には配給肥料だけだが現在桑葉量五五〇貫、上繭にして二五貫の反當收量がある。

B 二五貫取れば米を作るより現在でもよいのではなからうか。

A 實際はそんなだらうが、戦時中、終戦後食料一本槍で進み、今まで肥料がなくて困つたため反動的に水田へ肥料を投じた。一昨年は桑へ来た肥料は全部水田へ入れたが、昨年からはそれでも桑へ三貫か二貫五百は入れたらう。

水田への増肥はもう限界まで來ている。昨年水田へ反當六貫八百やつた。桑の方は増肥すれば飛躍的に増産出來る。今後肥料が増配されれば、増配しただけ桑へ投ずるだらう。

S 老齡の桑は現在の上まで肥料をやるだけで桑園能率は上りますか。

場長 試験場としては、現在のままの桑園では完全な桑園能率が發揮出來ないから、改種補植をすすめている。

C 繭を出せば米と取換えられるという風になればもつと増産出來るだらう。何といつてもまだ食料問題の方が農家の關心が強い。

A それと同時に繭の價格が相當高く維持されることが必要であつて、今度繭が五六〇〇掛になつたことは養蠶農家の増産意欲を非常に強く刺戟した。米と繭との間の適當な價格ということが必要條件だ。

場長 現在養蠶家は赤字だと思ふ。原蠶種を作る養蠶家は貫一、五〇〇圓から一、六〇〇圓だから收支償うだらうが、普通の養蠶農家ではだめだらう。製絲家はそれに對して赤字ではない。この點を考えて買いたい。

A 報價物資にろくなものはない。天龍社の還元物資がまああ使える位の物たらう。

S 養蠶協同飼育はどうですか。

D 桑園能率を上げて生産費を下げると共に、養蠶協同飼育又は壯蠶共同飼育によつて労働生産力を引上げる必要があると思ふ。又畜力を桑園に入れることも労働生産力を高めるために必要だと思ふ。

E 養蠶共同飼育は戦時中の努力資材の不足のために促進されたものであるが、現在も養蠶共同飼育で浮いた労働力は稲作に投ぜられてゐる。農林省は養蠶共同飼育場の助成金を出すそうだが養蠶専用桑園の設定にも助成が欲しい。現在縣費で養蠶用共同桑園に反當五〇〇圓の助成金がでてゐるが、もつと多くの助成が必要ではないか。又農地改革によつて共同桑園設定がかへつて困難になつてゐる現状である。蠶室の共同化と同時に農地委員が桑園

の共同化を認めるようにならなければならぬ。その他雑穀共同飼育の利益としては、何といつても雑穀共同飼育による農作の安定の効果は著るしい。

**S** 雑穀共同飼育をどのようにお考えですか。

**場長** 最後の上簇まで共同でやるという本格的な雑穀共同飼育は困難であつて、ただ晩秋穀等で各戸五瓦位を桑園の残葉で飼うといつたような場合に、部落共同で飼うといつたものが可能である。何しろ大きくなつてからは場所的に困る。

**E** 戦時中と異り雑穀共同飼育とか蓄力利用といつても、労働生産力を上げた場合の除剩努力をどうさばくかということが問題になる。あまつた努力で農村工業の如きものを起すということはこの伊那谷では困難であろう。

**B** そのためには矢張り工業の回復ということが重大な問題になる。場長が前に肥料が高いとおつしやつたが、その肥料は生産費が一〇〇圓のものを政府で四〇圓補助して農民に渡している現在で、なお高いといわれるのは、いかに日本の工業生産力が落ちていくかということが分る。

**C** 現在の工業の生産力はどんなに低下しているのですか。

**B** 日本の工業力はやつと戦前の生産力の六〇%に落ちたといつては、労働者は最盛期の昭和一九年一千万の時から二百萬位しかへつていない。戦前に較べてかえつて殖えている。それ故に生産率からいうと五〇%位である。

**A** 自身の問題になるが、私の経営は水田一町四反、畑六反

雑穀農家は語る。

であつて、従前とも生産費の引下げの方向として機械化し、畜力を入れて、大経営にしたいと思つて来た。しかし農地改革によつて経営の擴大は阻止された故、大経営による合理化が困難になつた現在、どのような方向に向へばよいか。

**D** 農地改革後の経営合理化の上昇の限度はどうであらうか。又経営の共同化によるコストの引下げをどのようにお考えか。

**I** 経営の擴張は確かに好ましい事だが、それにはあまりにも村が狭すぎ、人口が多い。方向としては出来る出来ないというのでなく、どうしてもそうならなければならないかと思ふ。しかし共同化そのものにも難點がありこのような山間部では特に困難であらう。共同化の條件の適應した所から始めるというより他はない。機械化といつても、それによつて浮いた労働力が遊んでしまつては何にもならない。

**E** 農村の土地の共同管理では、桑園の反當二〇人の努力を共同化によつて二人にへらし、それを果樹に向けようといつてい

**場長** 桑で浮かした努力を果樹に向けるといふのも一つの考え方だが、逆に飯田附近では果樹はもうだめだからと抜いている人もある位で、實際の所、現在の農民は將來に對して定見がないといふ他はない。

**D** 爲替レートの問題で現在雑穀農家の増産意欲が頭打ちの形だが、私の経験ではこの伊那谷では他作物への轉換ということが出来ない。地勢的自然的條件からすれば、關西の方がずつとよい

にも拘らず、長野において養蠶の盛んなのはやらざるを得ないからであつて、技術的に自然條件を克服して始めて可能になつたのであると考へる。

S 生絲が十四中から二一中への轉換は養蠶技術としてはどのように御指導なさいますか。

場長 上伊那の絲は能率本位で、良質でなく二一中に向きに出来ている。下伊那は戦時中の航空一號という特殊のために技術を傾倒し、良質の十四中向きのものになつてゐる。試験場としては適當な方向にそれぞれの特質を生かして行くつもりである。

ここの試験場は蠶を中心とした經濟的な問題を中心にした研究機關になる豫定である。現在、その一つとして有畜農家と蠶の問題を取上げ、役牛を入れホルシュタイン二頭、その他種羊を入れてゐる。桑園の中耕、除草を畜力で行い、労働力削減の問題を研究している。又乳牛と蠶の關係では、一頭の乳牛に對し今まで一反乃至一反五畝の飼料が必要だといわれていたが、代りに桑園の殘桑と蠶糞蠶渣をやつて行くことを奨励している。長野蠶業試験場では桑園三反で乳牛一頭が飼えるという強い説を説いている人もある位だが、今の桑園では少しむりであらう。しかし長野縣五萬町歩の桑園で八百萬貫の殘桑がとれることになる位である。しかも今までは霜枯れ殘桑は肥料として使つたわけだが、肥料價値はあまりなく、サイレージとして良好である。このように養蚕と養蠶の結びつきは仲々面白い問題であるが、現段階では種羊が養畜として適當であらう。乳牛は又勞力の問題で蠶と競合するから

自家勞力とにらみ合せて考へなければなるまい。

S 養蠶農家への試験場技術の浸透はどうですか。

場長 蠶絲業において蠶業試験所の技術の農家への浸透の問題は、農業に比すれば個別的な技術の高度さを特に必要とする養蠶業だけに、農民は技術に對して必死であり、技術浸透の問題は農試に比れば良好である。

E 農業の技術員が責任をもつていない所に技術浸透がないゆゑであつて、共同飼育場では技術員が全責任を負つてゐるし、養蠶家も技術員に信頼を置いてゐるから、本當の共同飼育が出来ないのであつて、もし運作などあると、技術員としては村にいたたまらない程のことになる。技術の結びつきも、技術者の先覺的意氣込によつて始めて可能になるのではなからうか。

I 色々と有益なお話を聞かせて頂いてどうも有難う御座います。(穴戸壽雄記)

### 三、豊村にて

日時 昭和二十四年二月三日  
場所 山梨縣中巨摩郡豊村役場

出席者

縣廳：蠶絲課、星野技師(H)

縣蠶業技術指導所：大原技術員(O)

研究所：愛甲(I)、馬場(B)、穴戸(S)

村：村長、協同組合長、養蠶實行組合長他二〇名

西吉田養蠶實行組合長(A)

澤登養蠶實行組合長(C)

農業協同組合長(D)

H わざわざ東京から調査にこられたのであるから、腹藏なく遠慮のない話をして貰いたい。

I 此度の調査の目的は、我國の貿易が通常の形へ戻るために單一爲替というものがきまつて、近いうち實施されることになるのであるが、果してその場合養蠶農家がどのようになるのであるらうかということである。養蠶、製絲共にその成立條件が國內のみで決めることが出来ない。それ故、養蠶農家の一番重大な關心事は、今度の爲替の決定で、現在の養蠶農家の増産の意氣込が打撃を受けるのではないか、ということであらう。我々の考えでも養蠶の前途はそう樂觀出来るものではない。

我々の調査の結果がすぐ實效を現わして、養蠶農家へ肥料が増え、補給金が出るということにはならないだろうが、我國の養蠶業がどのようにすれば復舊出来、立上ることが出来るか、ということを學問的に追求して行く我々の努力が、大きな目で見ても相懸の結果を生み、それが廻り通つて皆様方の手元へ戻つて来るということになれば幸だと思ふ。

豊村は戦前耕地面積の九五%までが桑園であつたものが、二二年には二五%へつているが、この轉換の結果變つたものは食料作物ですか。

A この村は、戦時中も大分終りまで残つていたのだが、二〇

年の桑園の全面的整理で食糧に轉換した。二一年まで残つていたのは勢力の関係で抜き切れなくて残つた分である。終戦直前まで一所懸命に抜いたので、終戦の話を聞いてあわてて各農家に一時抜くの見合せろといつて廻つた位だつた。

H 村の食糧は村で自給しろという時代で、主食でも軍用でもない櫻桃等は格ごうの換金作物であつたが、これ迄も切つた時代である。換金作物には殆んど變つていない。

C 此處の土地は水田が一筆もないという土地柄故、百姓でいながら食料に困り、桑の残つた畑も他の作物を作つても出来ないから残したようなものだ。勢力がなくて抜き切れずに根元から切つて麥を作つた人さえある。

A ここでは終戦後も食糧事情から桑を抜いたもので、戦時中命令がなくともあのころの食糧事情では抜いてしまつただろう。

この土地は御覽の通りの砂漠地で、食料は三〇%しか自給出来ず、自家食料保有農家は一軒もないという村である。昔は野菜さえ購入していたもので、飲料水は五〇尺以上掘らねば出ず、毎年のように旱害に悩まされている。桑でさえ八年位たたねば一人前にならぬという土地である。實際は此の村では桑とか果樹のような深根性のものでもないとても農作物の出来る所でない。

D 適地適作ということが稱えられているが、この村では養蠶において始めて生産力が發揮出来るのであつて、現在は食糧事情のためやむなく麥を作るといふ實情である。麥で反當三俵という低度の生産力であるし、又麥の裏作に「キャビ」「アア」を作るが夜

養蠶にやられて收穫皆無ということが多い。

村長 桑園にすれば米麥の供出がないということになれば、まだ大分桑園は増えると思う。

A 或村では繭一〇貫以上出すと、米、麥の供出をへらすというのもあるが、この村では桑を新植しても全然供出削減をへらさない。縣でも初年度は三分の一、次年度三分の二という風に食糧供出をへらすことにはなつてゐるが、村に来ると切迫した食糧事情のため桑を植えたからとて供出をへらしてはくれない。

E 反富收蠶量を決めて、米の代りに供出させる綜合供出制をとれば、豊村としては一番好都合である。食糧供出は今後どうなるだろうか。

I 安木五カ年計畫でも、五年後に四百萬トンの輸入食料を必要としている。今後食料問題は幾分軽減されることがあつても、完全に皆様のおつしやるような矛盾が是正されるということは無理だろう。しかし適地適作主義で全国的に生産力を高め、能率よく土地を使うという方向に進みつつあることは疑ない。

村長 事實食糧に引ずられて桑を抜いたのではあるが、もし繭の値を早く引上げたなら戦後も桑を抜くというようなことはなかつたろう。繭が一貫目四五圓位の時に柿は三〇〇圓位していたのだから。繭の値が安くてヤミに流しにくいことが桑から轉換した最大原因だ。

D しかし五六〇〇掛か五〇〇〇掛になつたからとて、桑の代りに麥やさつまを作りますというわけにはこの村では行かないだ

ろう。麥は作つてもとてもよそ壁には出来ない。

村長 爲替が圓高に決まると掛目を落されるという恐があるか。

B 落すとか落さないとかいうことは決つていない。しかし現在の五六〇〇掛というのは米とのパリティによつて決められたのだが、一般に基準年度として取られている昭和九一一年平均というのとは不當に繭値が安かつた時であるという理由で大正一〇年一昭和五年平均がとられている。もし之を九一一年ベースにとると、米とのパリティ計算をすれば四〇〇〇掛以下になる。これからみると繭のパリティ価格は例外価格であるといえよう。これは能率の差からこのような措置がとられたので、米麥の場合は反當

で戦前の九〇%の生産力であるに反して、繭は六〇%に落ちてゐるからである。繭のパリティ価格といつても所得的なパリティを政策的に考慮して決められたものである。

E 米の値が上り、繭の値は下るといふ様なことはおきないか。  
B 米の値が上るにつれてそれだけ爲替は安くなるならば、繭の値が高くなつても輸出出来るという風になるはずだが、米價と爲替レートの間にはこのような關係はないから、何らの手もつたずにおけば繭と米とのパリティは維持できなくなる。しかしそれでは困つた影響があるので、何らかの手がうたれるのではないかと思う。

A しかし實際は繭の方が他作物に比して刺に合わないように決められてゐると思う。税務署の査定にしても生産費に全然ヤミ

が入つていない。他のものはヤミで肥料を入れた代りにヤミで流せるが、繭ではそれが出来ない。

**E** 今でも桑はもうからんから、肥料をやらんで蚕にやるのだ。

**D** 割合合わなくなればナスでも作るかということになる。

**C** しかし昭和四、五年頃の繭値一回三十銭から二回十銭という不況の頃で、繭を賣るのをやめて、釜無川に捨てたという話があつた時でも、矢張り繭を作つた。蚕蠶という殺機的な要素の強いものでも、この村のような宿命的な土地柄のために桑を植えたのである。只現在のように國家において食料を保證して呉れない時代——昨年で五十日位缺産し、今年でももう十日遅配している——には仕方なく桑を抜くということになるのだと思う。

**A** 確に五六〇〇掛になつてこのまま繭値が維持されるにしても、他所では桑園を増やさないとだろが、此村では蠶座紙を除き新調することなく前の資材を使用するから復元が樂だ。蠶箔でも一ヶ二五〇圓位するから新調すると大變だ。

**村長** 外國の生絲相場が上る見込はないか。

**B** 現在二・五五弗というのは一年位は据置かれるだろう。又現在の日本には生絲の値を左右するだけの力がない。一昨年四・二五弗當時は滞貨して困り、伊太利の生絲が三・五〇弗だつたので、大體三弗を一寸上廻る程度に決まるだろうと思つていた。所がナイロンが丁度その頃値を引下げたので二・四五弗という所に決まつたのだという話である。現在ナイロンの生産者價格が一・八〇弗というのだから、生絲相場の値上りは難かしらう。

一昨年は生絲は四・二五弗、繭は二六〇〇掛という値のため、一弗一七〇圓という圓高だつたが、昨年は繭が五六〇〇掛になり生絲は二・四五弗となつたため、生絲の爲替レートが弗四二〇圓となり問題が難しくなつた。

**A** 繭を五六〇〇掛で買つて弗が三五〇圓位に決まつたら製絲業者はどうするのか。

**B** 製絲業者は經營の合理化による二〇%位の加工費の節約を餘儀なくされる。しかし政府が之に對し手放ししているわけではないと思う。財政支出の形で補給金を出して暫くの間經營の合理化までの時をかせがせるほかに道はないことにならうと一部でいわれている。

**C** 農林省の意向は繭を賣つて外國から小麦を買う方向か、それとも食料の自給の方向か。

一實際の所ははつきり決つていくといいきることは我々には出来ない。蠶絲局では繭を重視し、食管では主食に力を入れるというのが打明けた現状であろう。研究所としてはそのような場合に、米と蠶との間にどのような兼合の點を見つけるかが課題である。安本の復興計畫というのもそういう點に重點が置かれる。蠶の方が有利だから蠶をやれ、米が有利だから米をやれというのでなく、安かろうが高かろうが蠶を作ろうという八〇萬の農家が死活の問題として存在していることを無視して政策はたて得ない。米、蠶、その他の作物が綜合されてどのような生産力の総合的向上が考えられ得るかということが問題となる。

E 食料はヤミがなくなれば自給出来るという説があるがどうか。

B ヤミがあるということはヤミに隠れるべきそれ相當の經濟的理由があるからで、そのヤミがなくなるだけの經濟的な條件を作つてやるのでなければヤミはなくなる。ヤミがなくなれば自給ができるというのでなく、輸入食糧を加えて、ある程度供給が安定してくればヤミが少くなるのである。そして自給力もあがつて来る。日本の經濟が落着いてきても四〇〇萬噸の食糧輸入が必要であるといわれているが、四百萬噸の輸入能力ができればヤミがなくなつて實際の輸入はもつと少くてもよいことになるのだと考えることは出来る。

A 農家としては鹽と食料の綜合供出が望ましい。鹽を食料に換算すれば麥三俵取れる所が六俵取れることにもなる。五六〇〇掛の維持よりも、綜合供出にする方が復元は早いと思う。

H 綜合供出の問題は一方からすれば綜合計畫の必要性のことである。山梨縣でも綜合計畫委員會に於いて食料、蠶絲、畜産等々の部會を設け、綜合計畫の策定に努力している。

D この村では桑苗一六萬本を新植し二〇町の桑園を増したが本年度の食料の供出がへる所でなく却つて増加した。植えさせる時は食料の方の供出は縣で何とかして貰うといつて奨励した手前非常に困つている。綜合した計畫の下にやつて貰わないと蠶絲の方も食糧の方も勝手にいいことをいうから農民は困る。

A 村では食糧調整委員會が農薬調整委員會に變つて一種の綜

合計畫が出来るとなつたのだから、上部組織においてもそのようにやつて買いたい。

I 山梨縣のみならず各縣で綜合計畫又は復興計畫の委員會が出来て、そのような方向に進んでいると思う。増産々々というために農家にしつくりはまつた形にならぬことは、現状として認めねばなるまい。

村長 繭には今度から第二種事業税がかかるが、供出した物にまで事業税をかけるというのはけしからぬ。

A 税額は僅少だが農家に與えた影響は大きい。今年はそのためか繭のヤミ流しが非常に多い。

村長 掃立てた蠶種の互數に對して税金をかけるため、蠶種もヤミで買うという説が多い。

S 肥料の配給はどうですか。

村長 縣では桑の反別と繭の供出量とに半々の割で割當てるのですが、村では全部反別割當にしている。昨年で八貫八〇〇匁位でしょう。しかし桑にはやらずに麥へ廻すのが普通だ。五六〇〇掛になつてからは大分桑にやるようになったが。

F 桑の肥料は有機質がないとまずいので、この村のように糞が全然ない所では大家畜を飼うわけにゆかず、堆肥が全然出来ないのので、粕、大豆粕のようなものが欲しい。

C 昔は仲々澤山肥料をやつたもので、電報一本打てば北海道の隙が何車でも伏木經由で村の倉庫に入る位、大量に買つていたものである。最盛期には夏に反當四〇匁多に三〇匁もやつたもの

だ。

A 報價物資も、もつと報價の趣旨にかなうものが欲しい。

H 今年は綿製品が大分多いようだが。

A 自家で絹を織つていた頃には銘仙みたいなものを呉れるし裏作に棉を作つて大分自家用の綿製品が出来ると、綿製品を配給するといった具合に、どうもズレがあるから困る。現在農家で一番欲しいのはゴム製品たろう。

D この村では耕地面積三三〇町に六〇〇戸という平均反別五反という零細耕地故、多少でも現金収入を得るために桑以外には方法がない。私の計畫では五ヶ年間にこの村の耕地の三分の二を桑園にするつもりだ。昔は長野縣あたりからの漂泊勞力を多數雇入れたものだが、現在では殆んど自家勞力である。三分の二が桑園になつた時も勞力は自家でまかなえる豫定である。

E 現在私の家で晩秋に二人傭んだら、普通の日傭賃金は平均一日一五〇圓だが、養蠶の場合はつらいからとて三〇〇圓を要求された。このようでは雇傭勞力は一寸無理だ。

F この村では昔は桑條だけで燃料に事缺かなかつたが、今では私の家など一萬圓位燃料を買わねばならない。

O 實際このようにどうしても養蠶の必要な村というのは、全國にそうざらにあるものとは思わないが、このような村に對しては相當した手段を打つて頂きたいと思う。

I 重要なポイントを押えての増産こそ、單なる一般的な増産よりも有效であると私も信じている。

(尖戸郷雄記)